



回
文

百
人
狂
歌



一
首

青村

豆十郎



前書き

小倉百人一首の各歌を題材に回文歌集。これはおそらく世界初の試みでしょう。

おそらく、今後もこれだけくだらないことに挑戦する狂歌詠みや回文作者は現れず、この集も多く衆目を集めるほどではないだろうことは予想されます。

とはいえ、実に大変な戦いでした。確かにまだ満足はしていません、していませんが実力は出し切りました。

百人一首の。パロディ歌集は過去にも現在にもたくさん存在します。

狂歌を含め江戸期の戯笑文藝において。パロディのことを「振り(もじり)」と申します。この「もじり」は狂歌の中でも時に本道とも言える技巧です。和歌における

本歌取りの技術、同じ戯笑文藝における地口の技術などが相まって振りの狂歌は一時大いに盛り上がり落首などの形でもつくられました。江戸時代には小倉百人一首が広く世間に知られていましたから、こうしたパロディをつくるには格好のネタであったのだろうと推察されます。

古くは寛文九年（1669年）幽双庵著の『犬百人一首』というのがあり、これは小倉百人一首のもじり狂歌集として最古のものと考えられています。

狂歌が隆盛を極めた以降にはさらに多くのもじり百人一首がつくられたようです。中でも天保十四年（1843年）、蘆間蟹彦の編集でつくられた『蜀山先生狂歌百人一首』は狂歌界の雄、蜀山人を看板に据えただけあつて珠玉の作品が揃っています。（但し、すべてが大田蜀山人の作品ということではないようです）

それだけでなく、芝居をテーマにしたもの、職人仕事をテーマにしたもの、遊郭をテーマにしたものなど、主題をそろえて仕立てた百人一首もあります。

また百首のそれぞれ単独でのパロディも小咄の中などに多く登場し、小倉百人

一首の内容や説話を踏まえた川柳も存在します。

現代でも百人一首のパロディを用いて時事を詠む狂歌師は居りますし、私自身も大学のサークルで百首のパロディをつくったことがあります。

また、一方、回文集というのも、古いものから新しいものまでたくさん出版されています。

現在までに出版された回文集の中には数十の回文短歌を掲載しているものもきつとあるでしょう。しかし短歌狂歌を中心に据え、百を超える自作を採録したものはそうそう多くないと思われます。

と、言いますのも回文の巧者といえども狂歌でもある回文を数多くつくるのはなかなか骨の折れる作業であり、数多くつくっても労力に見合う評価を受けられる見込みはありません。

回文は長さをもって技量とされるとことが多く作家もひたすら長さを求めよ

うとする傾向があります。

短歌は大体が三十一文字ですが、この文字数は回文としてはそれほど長いとはいえません。百字を超える回文は幾らでもありますし、音数律の縛りが無い回文は他の回文と組み合わせることで長さを増していけますので、回文作者にとつて三十文字程度の回文は小一時間掛ければそれなりの作品を作り出せる筈です。

現状、回文は長さの他に、美しさ、早さ(即興性)、意味の分かりやすさ、時事に即しているか、などは評価されるようですが、音数律つまり五七五七七の形式には大きな意味が見いだされません。

回文短歌、回文狂歌が長さの割に難しい理由は音数律、その区切りの入り方が対称をなしていないことです。

回文川柳、回文俳句も音数律に縛られますが五七五と文字数が対称をなしていますので、七文字の短回文を五文字・五文字の回文で挟み込むだけです。そ

うした短回文をあらかじめ多数用意しておけば誰にでも創れます。もちろん良
いものを詠みたいとなれば組み合わせの妙味などが要求されますが回文狂歌に
比べればそれほど難しくはありません。

また、「痛き拡大／抱くか期待」のような七七連句。この形式も回文の誹諧、
回文の連歌(歌仙)などの短句に用いられることによつて数多く伝承されています
が、五文字・五文字の回文が少し長くなっただけです。回文五七五を作るより少
し難しいのですが、やはり字数が対称ですから回文狂歌ほど新規作成の難しさは
ありません。

ところが狂歌の音数律は五七五七七、単純に短回文をつないでつくることはで
きません。長回文や回文五七五を作るときとは違つて必要とするのです。

回文狂歌の作り方

ここで回文狂歌の作り方を二通り説明していきましょう。一つは内から外へ作る方法、もう一つは外から内へ作る方法です。

一つ目に内から外への作りを説明しましょう。回文狂歌は第三句が一番の要です。ちようどこの句は四文字目に回文の折り返しが入ります。そしてこの部分、上の句下五は三文字の回文の上に二文字の何かをくっつけたような形になります。

内から外へつくる場合は、まずその要となる三文字の回文を探すところから始まります。

たとえば三文字の回文として、「トマト」をチョイスしたとしましょう。

ここに二文字加える、「買うトマト」「喰うトマト」「持つトマト」「もぐトマト」……

こうしたものが要になります。

この時、付けた二字の逆読みが下の句の最初の二字になります。ですから、「切るトマト」などは「るき」から始まる下の句を考えなければならず、「る」で始まる言葉の少ない日本語では使いにくいことがわかります。

そこで「買うトマト」とすると「うか」から始まる下の句となります。これならば「浮かれ〜」か「浮かぶ〜」が考えられそうです。とりあえず「浮かれ〜」にして次に上の句中七(第二句となる部分)に目を移し、「くれ」で終わることを確認します。ここに日本語の句末には使いつらい文字、たとえば、あ、などが来ている場合には考え直した方が良くもれません。

こうして第二句と第四句を見比べつつ(第四句)浮かれ歩くか↓(第二句)何時か来るあれ↓(第四から第五句二文字目)浮かれ歩くか っい というように順調に伸ばしていきます。

後はこれを五文字・五文字の短回文で挟むだけですが、ここで手が詰まること

もよくあります。この場合は指示代名詞「あれ」をうまく説明する状況を入れ込めないという状態になりました。

このように行き詰まってしまったら、一旦戻って「浮かぶ」で考えてみます。ぶで終わることになった上の句中七は「く遊ぶ」「く学ぶ」などがありそうです。それぞれ下の句の浮かぶにつながる文字は「そあく」と「なまく」、「なまく」の方がトマトと生はどちらも調理に関する言葉で相性が良さそうですから「く学ぶ」で考えていきます。

第四句「浮かぶ生〇×」から私はすぐに〇×に「煮え」と入れることにしました。すると第二句は「●▲えに学ぶ」となり、●▲を埋めるとすると「教えに学ぶ」がもつともしつくりと来ます。下の句に目を転じると、五七五七七の最後の七文字は「しお」から始まることとなり「塩」という言葉になって好都合ですね。

後は、これを五文字・五文字の短回文で繋ぎます。一例はこんな感じになりました。

二度来ては 教えに学ぶ 買うトマト 浮かぶ生煮え 塩は適度に

このように、試行錯誤と理論とが相まって回文狂歌はできあがります。

次に外から内へつくる方法も説明しましょう。

七文字二回の回文句を二つ用意します。どちらも一つ目の側が「五文字と二文字」に区切れる構造をしている必要があります。

ここでは「遠ざかる駅／消える風音」「遠ざかる丘／薫る風音」という二つを用意しました。「遠ざかる十駅」「遠ざかる十丘」のように「五文字十二文字」に区切れる構造をしています。

「立った」という三文字の回文を用意した句で挟みます。

「遠ざかる駅 遠ざかる丘 立った 薫る風音 消える風音」

少し区切りを変えてみましょう。

遠ざかる 駅遠ざかる 丘立った 薫る風音 消える風音

たちまち回文狂歌となりました。いとも簡単につくってしまったようですが、外からつくる回文狂歌は特殊な構造をした七七連句を二つも必要とするのが難しいところですよ。

多くの七七連句は四文字・三文字・二文字を組み合わせて作るため四・三／三・四構造をしています。そうした連句は「五文字・十二文字」に分かれませんが、回文狂歌用の七七連句は五文字・五文字の短回文を少し延長する形で特別に作られることが多いです。しかし「五文字・十二文字」の構造を含む七七連句を数多く用意して記憶しておけば即興的に回文狂歌を生み出す事が可能になるかもしれません。

他にも短回文を組み合わせて区切りを変えて狂歌に仕立てる方法があります。基本は七七連句2つと三文字の要ですよ。

小倉百人一首を題とすることについて

既に述べたとおり本歌取り、つまりパロディの狂歌の元歌として小倉百人一首の中の歌が使われるというのは変わったことではありません。しかし、そうした狂歌は本歌の字句をそのまま引き継いだり、あるいは良く似た字句に置き換える、振り'によってパロディに仕立てられます。

しかしながら回文狂歌の場合は本歌である小倉百人一首が回文になっていないのでそうした手法はほとんど使えません。似たような景や題を詠む、あるいは各歌から特徴的な語句を抜き出して使用するくらいしか方法がありません。

しかし、それを始めると小倉百人一首の持っているもう一つの問題に気が付かされます。

実は小倉百人一首は、似通った内容や語句を持つ歌が多いのです。まるで、どこちらかが片方の本歌取りであるかのような似通いかたをしている対もあるのです。

『蜀山先生 狂歌百人一首』に「秋の田のかりほの庵の歌がるたとりぞこなつて雪は降りつつ」という歌があります。これは歌歌留多で天智天皇と光孝天皇の取り札が良く似ていることを使った狂歌で、それぞれ取り札に書かれた下の句だけ示すならば「わかころもてはつゆにぬれつつ」「わかころもてにゆきはふりつつ」です。

このように似た語句、同じ語句が複数の歌に使われているような例はまだまだあります。必然的に情景や主題についても似たような物が揃ってしまいます。「濡れた袖」「有り明けの月」「奥山に鹿が鳴く」「紅葉の錦」「人を恨む」などです。

どうやら、小倉百人一首の選者の藤原定家はわざとそうなるように百首を選んでいらっしゃるのです。どうも、共通な言葉動詞を対応づけて並べることでは何か暗号的なものがあらわれるようなそういう構造になっているらしいのです。

そのあたりの事は経済学者の林直道氏や文学者の織田正吉氏が『歌織物』とい

う概念を発表し解説してされています。これらは大変面白い説ですが、今回私がつくる回文狂歌とは直接関係しませんから詳しい話はいたしません。どうか、他の先生方の本で調べてください。

今回、小倉百人一首のパロディであること、回文歌であることを両立させる上で、この複数歌に重複する語句や主題が大きなネックになりました。つくった回文歌が百人一首中の特定の一首に同定されず、複数の歌の中からどれとでも解釈されうるような、そんな状態になってしまうのです。

例えば「濡れて問う 袖、品は無し 顔見てみ おかしな話 出そうと照れぬ」
（ぬれてとう そでしなはなし かおみてみ おかしなはなし でそうとてれぬ）
などと回文歌をつくってみました。

しかし、こんな歌では百人一首のどの歌を指しているのはまったく不明です。百人一首には袖が濡れていそうな歌が五首以上ありますし、他人から噂されるこ

とを心配している歌も数多くあります。これがどの歌をイメージして作られた物なのかさっぱり判りません。「濡れた袖」が含まれる歌は一つしか無いというような状態であったならば、そうした語句を一つ詠み込むだけで「ああ、あの歌だ」というように解釈してもらえたはずです。

小倉百人一首では特定の歌をイメージさせる為、どの歌からもなるべく多くの言葉を抽出する、あるいはより特徴的な言葉を抽出する必要があります。

ところが和歌というのは基本が三十一文字です。そしてこれを回文に仕立てる為にはそのうちの半分以上が折り返しや文型を整えるための文字に消費されます。本歌のイメージを表現するために残せる言葉、使える言葉は良くて十文字くらいです。

さらに、殆どの言葉は回文にするのに適しません。今回は緩和規則を殆ど採用しないので条件としてそもそも詠み込めない単語もたくさんあります。例えば「ちよう」や「しゆう」のような拗音のすぐ後に母音が来るような単語は、拗音を

清音に読み替えるなど何らかの緩和規則を用いなければ回文になりません。

こうした様々な問題を何とか乗り越えて回文狂歌百人一首をつくりました。

一つ一つの歌に込めた工夫を是非皆様に味わって頂きたいと思えます。

001 秋の田のかりほの庵の 苦をあらみ 我が衣手は 露にぬれつつ

(あきのたの かりほのいほの とまをあらみ わがころもでは つゆにぬれつつ)

天智天皇 (てんじてんのう)

刈る田刈りのみや雫に手は濡れぬ

果てに崩しや 実り語るか

転じ天皇

(かるたかり のみやしづくに てはぬれぬ

はてにくずしや みのりかたるか)

(てんじてんのう)

元歌の歌意は「秋の田んぼの仮小屋は屋根の苔が粗くて夜露が袖に落ちてくるなあ」ということです。

百人一首の巻頭であり、作者が著名な天皇ということにされているので多くのパロディが作られました。

寛文九年刊の『犬百人一首』では「あきれたのかれこれ困碁の友を集め我がだまし手はつひに知れつつを 鈍智てんほう」と狂歌にされています。

拙作では「空きの田を借りて作るの手間を惜しみ 濡れ手に粟と盗んで売りつつ」、これは農作物の盗難が多くニュースになっていた頃の作です。

この歌で入れ込みたいキーワードを挙げると「田んぼ」「収穫」「露」「濡れる」「苔が粗い」「衣手」「刈りあるいは仮小屋」など。このうちから四つくらいは盛り込みたいところです。

まずは要に「手は濡れぬ」を置きました。すると、下の句は「果て」から始まる」とになります。

濡れるの縁で「露」を入れたいのですが逆になったとき「ゆつ」に繋がる言葉はあまりないのです。そこで「しづく」「くずし」のペアを持ってきます。小倉百人一首といえは歌歌留多、これを「刈る田」と掛詞を効かせて上五に持ち込みます。すると最後は「くたるか」後は間に入る助詞や短い言葉を少し整えて出来上がりです。

刈るべき田んぼを刈り終えて、皆で飲みながら収穫や問題点について語り合っているそんな雰囲気の歌になりました。

上五の「刈る田刈り」は「カルタ狩り」に意味が通じます。そこから罰杯付きで百人一首の札取りをしているというような、そんな裏の意味もあります。

また、元歌が天皇御製ということとで隠し込みとして「仮の宮」「御法」という言葉が入っています。

「のみ、や、雪に」を「のみ、て、雪に」にしようかとこれでかなり迷いました。

「刈る田刈りのみて雪に手は濡れぬ 果てに崩しや 実り語るか」

このように変えると手が強調され下の句では「果てに崩して」となり、この方がくつろいだ感じになります。

昔に作った没歌も披露しておきましょう。

夜ぬれた 労済みし帰途の 小屋根や このとき清水 雨露垂れぬるよ

(よるぬれた ろうすみしきとの こやねや

このときしみず うろたれぬるよ)

002 春過ぎて 夏来にけらし 白妙の 衣ほすてふ 天の香具山

(はるすぎて なつきにけらし しろたへの ころもほすてふ あまのかぐやま)

持統天皇 (じとうてんのう)

さあ夏が！ クロス干したわ夏待つ間

綱渡し干す 六月な朝

字倒天皇

(さあなが くるすほしたわ なつまつま

つなわたしほす ろくがつなあさ)

(じとうてんのう)

本歌の歌意は「春は過ぎて、いよいよ夏なのでしょうか。天の香久山では白い衣を干しているのでは」と初夏の情景です。一つ目の、濡れた衣手、と併せて「濡れた御衣みそで 隣の山で干しにけり」などと古川柳に詠まれています。

必要なことは、布、を干すこと、そして初夏の情景です。天香具山も表現したいけれど返しは「まやぐかかまあ」「これはかなり使いにくいですね。実は「ころも」や「ぬの」も使いにくいです。

下五は「夏待つ間」にしました。下の句の始まりは「つな」です。ここは洗濯用ロープと考えることにしました。すると、渡すとか、架けるとか、張るとかいう言葉が欲しいところです。

そこで「私くしたわ」の形でよく回文にされる「渡し」を入れて、初夏の感慨を伝えられる形に全体を整えました。

どこでもボツ歌。残念ながら、清濁の対応が取れていません。

春過ぎ日 夏も来赤で 子供らも どこでか秋も 綱引きするは

(はるすぎひ なつもきあかで こどもらも

どこでかあきも つなひきするは)

003 あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の ながながし夜を ひとりかも寝む

(あしびきの やまどりのをの しだりをの ながながしよを ひとりかもねむ)

柿本人麻呂 (かきのもとのひとまろ)

友の気が まあ長い夜が明けていて

ケアがよいがな甘柿の元

書きの元人丸氏

(とものきが まあながいよが あけていて

けあがよいがな あまがきのもと)

(かきのもとひとまるし)

本歌は長い長い序詞と長い長い山鳥の尾と長い長い独り寝の夜とが見事に調和した歌です。

作者は「歌の聖^{ひじり}」などと呼ばれ神様扱いの柿本人麻呂です。「人丸」などとも言います。

回文狂歌は人丸の友人視点で描いています。

人丸はその名の通り人柄が円く、気が長くて、親切であり、彼は渋柿じゃなくて大甘の甘柿だなあ、と渾名しています。

そして、ボツ歌も。昔、今回と同じ挑戦をやりかけて挫折した際の名残です。

胸も借り たふんと膨ら 眠る夜 胸楽蒲団 二人かも寝む

(むねもかり たふんとふくら ねむるよる

むねらくふとん ふたりかもねむ)

ずいぶんと平和で暖かい歌になりました。

004 田子の浦に うちいでてみれば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ

(たごのうち に うちいでてみれば しろたへの ふじのたかねに ゆきはふりつつ)

山部赤人 (やまべのあかひと)

雪旅籠 田子も根方も皆白し

波も高嶺もゴタゴタは消ゆ

詠みでの有人

(ゆきはたご たごもねかたも みなしろし)

なみもたかねも ごたごたはきゆ)

(よみでのあるひと)

見ての通りの歌です。「旅先の田子の浦から富士山を見たら真つ白な雪が降っていたよ」という意味で元は万葉集に採録されています。

作者は先の柿本人麻呂と並び称される山部赤人です。「山部赤人」という名前なのに山に白妙の雪と歌っているところがよく川柳のネタにされます。

回文化の旅籠とはは宿屋です。そこから、まるで序詞のように田子を引き出し、雪で真つ白になった静寂を呼び出してみました。元歌の美しい情景を壊さないようにと心懸け、その気持ちをもじり名の「詠みのある人」に込めました。

005 奥山にもみぢふみわけなく鹿の 声聞く時ぞ 秋はかなしき

(おくやまにもみぢふみわけなくしかの こゑきくときぞ あきはかなしき)

猿丸太夫 (さるまるだゆう)

枝紅葉は 鹿、猿鳴くか、秋風か

木赤くなるさ 慳恥じ身悶え

達磨る猿丸だ

(えだもみじは しかさるなくか あきかぜか

きあかくなるさ かしはじめもだえ)

(だるまるさるまるだ)

古来、日本人は鹿の声を哀しげと聴き、中国人は猿の声を哀しげと聞いたのだそうです。しかもこの鹿は人里から離れたところで鳴いているのでより一層哀しげなのです。

作者は百人一首の解説書で謎の歌人と紹介されることが多い猿丸太夫です。

回文狂歌は秋の木が紅葉するのは鹿や猿が鳴くからでも秋風が吹くからでもなく、木が恥じて赤くなっているのだ、という解釈です。

作る過程で抛ん所なく字余りになりました。要に近い部分を増やさず、第一句、第五句を一字ずつ増やした形です。

006 かかさぎの 渡せる橋に おく霜の 白きをみれば 夜ぞふけにける

(かささぎの わたせるはしに おくしもの しろきをみれば よぞふけにける)

中納言家持 (ちゆうなごんやかもち)

詩は見もし 増し月明かり 鵲さ

盛りか秋津 島 霜 御階

家持とは土地もかや

(しはみもし ましつきあかり かかさぎさ)

さかりかあきつ しましもみはし)

(やかもちとはとちもかや)

七夕の夜には鵲が集まって天の川に橋を架け牽牛織女を娶すと言い伝えられています。本歌は天の川と霜に光る宮中の御階とを重ね合わせて詠んだものと言われています。

作者は大伴家持。江戸川柳では「百人のうちに大家は一人なり」などと、この名前を「家持ち」とわざと誤釈したものがいくつもあります。

秋津島とは日本のこと。秋の夜長に御階の警備がてら月明かりで漢詩を読み、天地の様子を思い詠じた歌ということになります。

詠み手の名については、「家持」の名に引っかけた回文としました。

007 天の原 ぶりさけみれば 春日なる 三笠の山に いでし月かも

(あまのはら ぶりさけみれば かすがなる みかさのやまに いでしつきかも)

阿倍仲麻呂 (あべのなかまろ)

出のきつさ 神春日なり 母さんさ

あかり流すか 三笠月の出

阿倍小部麻呂

(でのきつさ かみかすがなり かあさんさ

あかりながすか みかさつきので)

(あべこべまろ)

遣唐使として唐に送られそこで詠んだ歌とされています。内容は月を見て、故郷を懐かしむものです。ここで詠われている三笠山は、春日大社のある春日山とされています。

現在では、三笠というとお菓子の名前ですね。

回文歌では「出のきつさ」で外地にいる苦勞を表し、月の光を母親が思いを届けてくれたものという解釈で歌にしました。

もじり名は回文は「あぐべ」(物事の順序や位置が、本来のあり方と逆であるさま)でも読める所から付きました。

008 わが庵は都のたつみしかぞすむ 世をうぢ山と 人はいふなり

(わがいはは みやこのたつみしかぞすむ よをうぢやまと ひとはいふなり)

喜撰法師 (きせんほうし)

小屋見知れ 名は宇治の鹿 山と身と

まやかしの慈雨 離れし都

喜撰本籍

(こやみしれ なはうじのしか やまとみと

まやかしのじう はなれしみやこ)

(きせんほんせき)

六歌仙の一人で宇治は茶所。この宇治と「憂し」とを掛詞にした元歌。

「太平の眠りを覚ます蒸気船たった四杯で夜も眠られず」と歴史に名高い黒船の狂歌は『上喜撰』というお茶のブランドを詠んだ物でここからもお茶・宇治・喜撰法師という連想が一般にも定着していたことが伺えます。

また、この歌を本歌取りした蜀山人の狂歌は大変傑作で「わが庵は都の辰巳午ひつじ申酉戌亥子丑寅う治」と干支を見事に使っています。

回文歌では庵を小屋に置き換え、「宇治」「鹿」「離れし都」を入れ込みました。

009 花の色は うつりにけりないたづらに わが身よにふる ながめせしまに

(はなのいろは うつりにけりないたづらに わがみよにふる ながめせしまに)

小野小町 (おののこまち)

美しさ 目当ての奴と 小町墮ち

真こと艶の手 雨さし苦痛

町小野小町

(うつくしさ めあてのやつと こまちおち

まことつやのて あめさしくつう)

(まちおののこまち)

百人一首の中では特に有名な一首です。彼女は絶世の美女とされ、百人一首の歌カルタでは剩りの美しさに絵にも描けないとして後ろ姿を載せているものが多いです。

また、生涯独身であつたという伝説から老いてうらぶれた姿を描く物語も相当数有ります。

こちらの歌ではまるつきり逆に阿婆擦れ駆け落ち的な歌にしてみたかったので、それでも色香のあるところがやはり小野小町ですね。

010 これやこの行くも帰るも わかれては しるもしらぬも 逢坂の関

(これやこのゆくもかへるも わかれては しるもしらぬも あふさかのせき)

蝉丸 (せみまる)

知らぬ身は 憎き背中や 出逢いたい

艶やかな関 故郷は見ぬらし

蝉丸 昼間見せ

(しらぬみは にくきせなかや であいたい

あでやかなせき くにはみぬらし)

(せみまるひるまみせ)

琵琶の名手として知られ、源博雅に秘曲を伝えたという物語もあります。元々は高貴な身分であったが盲目となり庵を構えてひっそり暮らしていたとされます。

横井也有の狂名が螻丸けらまるでこれは蟬丸を振ったものと思われます。

回文歌は、見ず知らずの人に厳しい世間であっても故郷を顧みず、多くの人に会いたいこの逢坂という素晴らしい関のように。という思いを込めました。

011 わたの原八十島かけてこぎいでぬと 人にはつげよあまのつり舟

(わたのはら やそしまかけてこぎいでぬと ひとにはつげよあまのつりぶね)

参議篁 (さんぎたかむら)

釣り船を！ しかしまあ悪たわいない

渡るわ甘し菓子を舐りつ

難儀篁

(つりぶねを しかしまあわる たわいない

わたるわあまし かしをねぶりつ)

(なんぎのたかむら)

作者は小野篁。嵯峨天皇の頃の人で大変学才のある人だったとされています。エピソードとして「無悪善」という落書が都に流行った折、小野篁だけが「さがなくてよからん」と読んでみせたので落書の犯人ではと嵯峨天皇に疑われ、抗弁してナゾナゾのテストを受けた話が有名です。

他にも言語遊戯にまつわる話もたくさんあるのですが、この本では触れません。回文歌は元歌と同じく島流しに遭っている様子としました。ちなみに彼はすぐに帰京復位を果たしています。

012 天つ風 雲のかよひ路 吹きとぢよ をとめの姿 しばしとどめむ

(あまつかぜ くものかよひぢ ふきとぢよ をとめのすがた しばしとどめむ)

僧正遍昭 (そうじょうへんじょう)

僧、俗夫 是か妻漁る 乙女止め

通るさ天津風吹くぞ嘘

僧正返上

(そうぞくふ ぜかつまあさる おとめとめ)

とおるさあまつ かぜふくぞうそ)

(そうじょうへんじょう)

元歌は五節の舞を見ていた遍昭がその美しさに名残惜しんで詠んだとされま
す。

作者は六歌仙の一人であり俗名を良岑よしみねの宗貞むねさだと言います。

僧正というのは結構位の高い僧侶であり江戸川柳では「遍昭は乙女に何の用が
ある」などと歌われている。ただ、元歌を歌った俗人の頃は色好みという噂もあり
やはり用はあったのでありましょう。

回文歌は僧が凡夫に戻って妻を探し乙女を止めた様子とします。詠み手の名
は僧正の位を返上する意味と、回文らしく返って読むことを重ね合わせました。

013 つくばねの峰よりおつる みなのか 恋ぞつもりて 淵となりぬる

(つくばねの みねよりおつる みなのがは こひぞつもりて ふちとなりぬる)

陽成院 (ようぜいいん)

皆の出ん 歌垣歩く つくばビバ

句創る秋が タウンでの波

大勢院

(みなのでん うたがきあるく つくばびば

くつくるあきが たうんでのなみ)

(おおぜいいん)

「つくばね」こと筑波山は歌垣という当時の合コンが盛んだったことで有名であり、「みな川の川」は漢字では「男女の川」と書きます。

筑波山は都から遠く標高877メートルで大して高い山ではないのですが万葉集では富士などよりも遙かに多く歌にされた土地です。おそらく当時の人にとつては異国の山みたいなものでしょうね。

私も長いことつくば市に住んでいましたのでその思い出を込めつつ回文を仕立てました。

014 みちのくのしのぶもぢずり 誰ゆゑに みだれそめにし 我ならなくに

(みちのくのしのぶもぢずり たれゆゑに みだれそめにし われならなくに)

河原左大臣 (かわらのさだいじん)

変わる愛 誑しめ、それだ 陸奥の

血乱れ初めし 裸体ある和歌

変わらぬ左右大事に

(かわるあい たらしめそれだ みちのくの

ちみだれそめし らたいあるわか)

(かわらぬさゆうだいいじに)

みなもとのとある

源融、源氏物語の光源氏のモデルと目される人です。嵯峨天皇の子で臣籍降下、暮らしは豪奢で宇治平等院は元を辿ると彼の別荘地だったそうです。

本歌は行きずりのつもりだった女性から手紙が届いたので、書き送ったという話が残っています。

回文歌、光源氏のような女誑しそれでいて皆を平等に大事にする男を題材に、少しエロチックに仕上げました。

015 君がため 春の野に出でて 若菜つむ わが衣手に 雪はふりつつ

（きみがためはるののにいでて わかなつむ わがころもでにゆきはふりつつ）

光孝天皇 （こうこうてんのう）

春雪の 見つけていたな 交わしたし

若菜炊いてけ つみの消ゆるは

孝行娘

（はるゆきの みつけていたな かわしたし

わかなたいてけ つみのきゆるは）

（こうこうむすめ）

この歌はまだ即位前の不遇な皇子の頃の歌ですが、実際に自ら菜を摘んで人にプレゼントしたとき沿えた物だと考えられています。天皇としての在位は短く55歳から三年あまりでしたが、後に文芸中興のキツカケづくりになったとされます。

若菜と天皇という取り合わせは何よりもまず、万葉集の巻頭歌にある雄略天皇の歌、菜摘の子のエピソードを思い起こさせます。

籠^こもよ み籠^こ持ち 堀串^{ふくし}もよ み堀串^{ふくし}持ち

この岡に菜摘ます子 家聞^のかな 名告^のらさね

そらみつ大和の国は おしなべて我こそ居れ

しきなべて 我こそ座^ませ 我こそば 告^のらめ

家をも名をも

(籠やスコップをもって菜を摘んでいるお嬢さん、あなたのお家は何処ですか、お名前は何といたのですか。私はこの大和の国を治めている者です、まず、私の方か

ら名乗らせていただきますしよう)

天皇という、ちよつとドエライ立場の人にこういう事をされると、かなり迷惑でもあるのですが、そこはそれここはそれ、名も菜も交換し合つて雪の目出度さと共に罪も消えていくという様子を回文歌に込めてみました。

016 立ちわかれないなばの山の峰に生ふる まつとし聞かばいまかへりこむ

(たちわかれないなばのやまのみねにおふる まつとしきかばいまかへりこむ)

中納言行平 (ちゆうなごんゆきひら)

妻が聞きえい、と因幡よ求め夢

友呼ばないと家危機が待つ

チユウなどを聞き平

(つまがきき えいといなばよ もとめゆめ)

ともよばないと いえききがまつ)

(ちゆうなどをききひら)

言わずと知れた業平の兄。柄の付いた片手鍋を行平鍋と言いますがこれは行平がこれで塩を製する方法を伝えたからだと言っています。江戸川柳では「兄弟は鍋と橋とに名を残し」などと言い、他にもこの兄弟の伝説は数多あります。

能曲では須磨に配流されたとき松風・村雨という海女の姉妹に手を付けたと
いうような浮き名がありますが、実際はかなり頑固で民政に手腕を発揮し上司
にも度々逆らうというような骨のある人物だそうです。

本歌は因幡に赴任する際に都で友人達に詠んだ歌です。「因幡」と「去なば」、
「松」と「待つ」が掛詞として働いています。

回文歌は、浮気がバレそうになって、えいと因幡にトングラシアバンチュール。帰
るときには友人にとりなしの助けを求めるといふ形にしました。

017 ちはやぶる 神代もきかず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは

(ちはやぶる かみよもきかず たつたがは からくれなゐに みづくくるとは)

在原業平朝臣 (ありわらのなりひらあそん)

蚊や蜂の 来た毫碌を 唾付けつ

バツを喰ろうも 滝の千早か

斯様な姿に我は業平

(かやはちの きたもうろくを つばつけつ

ばつをくろうも たきのちはやか)

(かようなすがたにわれはなりひら)

在原業平、伊勢物語に出てくる男のモデルとされ、評判のプレイボーイ。六歌仙の一人に数えられます。

元歌には、この解釈を巡る著名な落語があります。花魁千早と相撲取り竜田川の話。回文歌はうらぶれて入水自殺する千早の姿です。

更に、在原業平が伊勢物語中で詠んだ折り句（アクロスティック）和歌にちなんで、カキツバタの折り句としました。

018 住の江の岸による波よるさへや 夢のかよひ路 人目よくらむ

(すみのえの きしによるなみよるさへや ゆめのかよひぢひとめよくらむ)

藤原敏行朝臣 (ふじわらのとしゆきあそん)

醒め夢の 甘い愛なら すみの江の

ミスらない愛 まあ呑め夢さ

夢路から敏行き帰り

(さめゆめの あまいあいなら すみのえの

みすらないあい まあめゆめさ)

(ゆめじからとしゆきかえり)

作者は在原兄弟の妹婿で優れた書家。この歌よりも「秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる」という歌が有名です。住の江は「墨」「隅」に通じ暗さを演出します。

歌会があつたとき、最近冷たい恋人への思いを込めて「夢でも逢おうとしてくれない」と詠んだそうです。

回文歌は飲み会の愚痴っぽい恋愛談義としてみました。

019 難波潟 みじかき蘆のふしのまも あはでこの世をすぐしてよとや

(なにはがた みじかきあしのふしのまも あはでこのよをすぐしてよとや)

伊勢 (いせ)

元来ぬし 愚する葦背 伸ばす明日

場の伊勢市夜 すぐ死ぬことも

伊勢の所為

(もとこぬし ぐするよしせい のばすあす

ばのいせしよる すぐしぬことも)

(いせのせい)

難波潟、難波江と言えば葦や漕標が欠かせません。節と間には「臥し」という語も懸かつており病んで臥している様子を詠み込んでいます。

彼女は多くの政治家と恋愛し宇多天皇の寵愛を受け親王とも結ばれていますのでかなりの恋愛上手。歌集にも多くの歌を残しています。

さて回文。蘆は「あし」が「悪し」に通じて縁起が悪いと「葦簀」「吉原」「よしのズイから天井覗く」など「よし」と言い換える事が多いです。そこに「助長」の故事にあるような「アシを引つ張る愚行」を加え、市政の失敗としてみました。

020 わびぬれば いまはたおなじ 難波なる 身をつくしても あはむとぞ思ふ
（わびぬれば いまはたおなじ なにはなる みをつくしても あはむとぞおもふ）

元良親王 （もとよししんのう）

咎ばれた 琵琶に涙見 死よ友と

誼だ皆に 詫びたれば賀と

元良、逆も良し

（とがばれた びわになみだみ しょともと

よしみだみなに わびたればがと）

（もとよしぎやくもよし）

「わびぬれば」は「煩悶とする」様子。「みをつくし」は海上のブイで「身を尽くし（誠心誠意、自分を滅ぼしてでも）」と同音なので掛詞として多用されます。

作者は恋愛にマメな人柄で『今昔物語』には「極き好色にてありければ、世にある女の美麗なりと聞こゆるは、会ひたるにも未だ会はざるにも、常に文を遣るを以て業としける」などと描写されており今に伝わります。

この歌は当時の権力者宇多上皇の寵姫、藤原褒子（京極御息所）に対して送ったとされ、実際かなりの命知らずです。

回文歌では、「わびぬる」を「詫びぬる」に変え、身を尽くしかけた所で管絃の宴を催して謝罪し許して貰うことにしました。隠し題で「もとよし」が入れられています。

021 今こむといひしばかりに 長月の 有明の月を まちいでつるかな

(いまこむといひしばかりにながつきの ありあけのつきを まちいでつるかな)

素性法師 (そせいほうし)

狐の子 朝今しがた なあ出るで

貴方が仕舞い さあこの寝付き

素性は返状の子

(きつねのこ あさいましがた なあでるで

あたたがしまい さあこのねつき)

(すじょうはへんじょうのこ)

「今行くよ」と、言ったから待ってたのに、秋の長い夜を待ちつづけ、とうとう夜明けの月が出る頃に、私は未だ待っているんですよ。という、恨みがましい歌ですが、女性には受けているそうです。

作者は僧正遍昭の子です。

江戸川柳に、「今コンと言いしばかりの狐かな」という句があつたような、無かつたような気がする(ひよつとすると、私の妄想)、兎も角明け方まで待ちわびる様子と、諦めて寝付く様子と、狐の子を使った回文歌です。

まったく余談ですが、私は狐を模した毛玉のキーホルダーに行平という名前を付けています。これもまた、「待つとし聞かば今帰りコン」というただそれだけの連想。

作者名のモジリは、素性を「すじょう」と誤読する混ぜっ返しです。

ボツ歌一首。「狐、月」との絡みから他にも何種類かできたのですが、これだけ載せておきます。

今しがた なあ狐こん 佐渡の夜の 道産子寝付き 貴方が仕舞い

(いましがた なあきつねこん さどのよの

どさんこねつき あなたがしまい)

022 吹くからに 秋の草木の しをるれば むべ山風を 嵐といふらむ

(ふくからに あきのくさきの しをるれば むべやまかせを あらしといふらむ)

文屋康秀 (ふんやのやすひで)

寄付は苦か 地区決総意 だからホラ

課題嘘つけ 口欠くは吹き

ブン屋は安いで

(きふはくか ちくけつそうい だからほら

かだいうそつけ くちかくはふき)

(ぶんやはやすいで)

元の歌は字形について詠んだ字喩歌です。山と風を縦に並べると嵐という字になります。

回文歌でもそれに倣って字喩を取り入れました。しかも元歌の最初の文字である「吹」を使っています。

私も沢山寄付を出しますから皆さんも一人5口位は寄付してくださいね、と地区の皆で示し合わせたのだが、言い出しっぺはなんだかんだと言い逃れして寄付をしなかった。そのホラ吹きを非難して言うのではないが、「口を欠く」と書いて「吹」と読むなあという回文歌。

023 月みれば千々にものこそかなしけれ わが身一つの秋にはあらねど

(つきみればちぢにもものこそかなしけれ わがみひとつのあきにはあらねど)

大江千里 (おおえのちさと)

目尻と悲喜 悪しくは月と 幸見し身

千里来つ白氏 秋独り占め

大江千里とは無関係

(めじりとひき あしくはつきと さちみしみ)

ちさときつはくし あきひとりじめ)

(おおえせんりとはむかんけい)

「月を見れば千々に」「我が身一つの秋」という対比が美しいのです。

漢学者でもある作者が

燕子楼中霜月夜 秋来只為一人長

(えんしろうちゆうそうげつによる、あききたりただひとりのためにながき)

という白氏文集の詩を元に作ったとされます。

大好きな歌の一つだったので、一番時間がかかりました。もっと詠み込みたいことがいろいろこの歌にはあるのだけれど、ここで詰まって先に進めなくなっていたので、この辺りで妥協。

024 このたびはぬさもとりあへず 手向山 もみぢのにしき 神のまにまに

(このたびはぬさもとりあへず たむけやま もみぢのにしき かみのまにまに)

菅家 (かんけ)

時期伸びた 幣もやらない 手向け山や

煙たいならや 燃さぬ足袋の生地

菅家居ない件か

(じきのびた ぬさもやらない たむけやまや

けむたいならや もさぬたびのきじ)

(かんけいなくけんか)

右大臣にまでなったものの、最後は太宰府に左遷されて崇り神扱い、その後、天神様として祭られるようになり、学問の神様としても知られます。左遷されたとはいえ、大臣にまでなった学者は多くないからです。

本歌は朱雀院が奈良の吉野に旅行した際の随行で、路程に道祖神を見つけて詠んだとされます。

回文化では紅葉の時期でもない頃にまた手向け山で、代わりに足袋でも燃やしてこようと思ったが辺りが煙たくなってしまいうので止めにしたというお話。

025 名にし負はば 逢坂山の さねかづら 人にしられで 来るよしもがな

(なにしおはば あふさかやまの さねかづら ひとにしられでくるよしもがな)

三条右大臣 (さんじょうのうだいじん)

名がもしよ 流布は着流し 麻の布

さあしがなきは 振るよしもがな

え、またか駄作か、定方め

(ながもしよ るふはきながし あさのぬの)

さあしがなきは ふるよしもがな)

(え、またか、ださくかさだかため)

実葛^{さねかずら}は赤い実のなる蔓植物で美男葛とも申します。逢坂山と逢う、実葛と小寝（一緒に寝ること）、来ると繰る（たぐり寄せる）と掛詞を重ねる元歌。

詠み手は藤原定方です。息子の朝忠も小倉百人一首に入集しています。

回文歌も本歌に合わせて掛詞の使用を心懸けました。

浮き名が流布する、その流布という言葉が流れる布であるように、着流しの麻布のようになつまらない貴方を振ってしまふ方法は無いものだろうか。

詠み手の名は、「定方」の母音がばかりだったことに惹かれてローマ字回文です。

(E` Mataka Dasakuka SADAKATA Me)

026 小倉山 峰のもみぢ葉 心あらば いまひとたびの みゆきまたなむ

(をぐらやま みねのもみぢば こころあらば いまひとたびの みゆきまたなむ)

貞信公 (ていしんこう)

よう浴びた タフ紅葉なの ビンタ類

耽美の馴染みも 再び逢うよ

貞信公合コン強いて

(ようあびた たふもみぢなの びんたほほ

たんびのなんじみも ふたたびあうよ)

(ていしんこうごうこんしいて)

詠み手は藤原忠平、亭子院(宇多上皇)の大堰川に遊山に同行した際、院が小倉山の紅葉を見て漏らした「息子(醍醐天皇)にもこの紅葉を見せてやりたい」という言葉を伝えるべく詠んだものです。

このそつの無さでもって、彼は藤原氏繁栄の基礎を固めました。

さて、回文歌はちよつとチャラク頬に紅葉をつくりつつ、女遊びも世渡りも巧そうなキャラ設定です。紅葉の名所にして小倉百人一首が編纂されたという小倉山。詠み手のもじり名には忠平と紅葉から「ただひらに請うよう」にしようと思っていたのですが、歌の内容が軟派になったので変えました。

ボツ歌というか、途中の作も載せておきます。

よう浴びたタフが耽美の地味求め 嫁と紅葉のビンタが 二度合うよ

(ようあびた たふがたんびの じみもとめ

よめともみじのびんたが ふたたびあうよ)

027 みかの原 わきて流るる いづみ川 いつみきとてか 恋しかるらむ

(みかのはら わきてながるる いづみがは いつみきとてか こひしかるらむ)

中納言兼輔 (ちゆうなごんかねすけ)

呪い済 見掛けて虹絵 リアルある？

有り得じにて 毛、髪水色の

消すね兼輔

(のろいずみ みかけてにじえ りあるある

ありえじにて けかみみずいろの)

(けすねかねすけ)

本歌は一度も会ったことのない人への恋心を詠んだものです。上の句はまるまる全部「いつ見」を引き出すための序詞となっています。

この人は、賀茂川の堤に屋敷を構えていたので堤中納言と呼ばれ、他の歌人達を集わせてたまり場を築いていました。

回文歌の虹絵は一部の人には説明するまでもないことでしょうけど、二次元世界を描いた絵ということでアニメ絵。それを見かけて髪の毛が水色であるようなリアルでは有り得ない女の子に恋をする主人公、そんな奴、呪われてしまえという気持ちを歌にしました。

「いずみ」「みか」とを隠し込みつつ、リアリティに欠ける夢見がちな恋愛感情を詠むことで元歌と対応させたので、それを味わってください。

028 山里は冬ぞさびしさまさりける 人目も草もかれぬと思へば

(やまざとはふゆぞさびしさまさりける ひとめもくさもかれぬとおもへば)

源宗行朝臣 (みなもとのむねゆきあそん)

外様やと 民草に智の 離れかれ

名は後に咲く 見たと山里

皆元に帰り行き

(とぞまやと たみくさにちの はなれかれ

なはのちにさく みたとやまざと)

(みなもとにかえりゆき)

この人は光孝天皇の孫に当たりますが、臣籍降下して地方の副官的なポストを転々としました。不遇を嘆く説話の多い人です。歌の世界では紀貫之と親交があり三十六歌仙にも入りそれなりに名を咲かせたと言えるでしょう。

回文歌の意味は「アイツはよそ者だと馬鹿にしている民だが、後に私の名は評判になって、こういう人が居たんだよと、山里でも噂するようになるだろう」という意味です。現代でも落下傘候補などと批判をしたり、でもその人が中央に太いパイプを持っていると結局それが必要だったりと、まあ、色々です。

029 心当てに折らばや折らむ 初霜の おきまどはせる 白菊の花

(このころあてにをらばやをらむはつしもの おきまどはせる しらぎくのはな)

凡河内躬恒 (おおしこうちのみつね)

抜けぬ梁 この釘木釘 らしくなく

白菊黄菊 残りは抜けぬ

躬恒と菊、茎と根摘み

(ぬけぬはり このくぎきくぎ らしくなく)

しらぎくきぎく のこりはぬけぬ)

(みつねときくくきとねつみ)

当て推量に折ろうとすれば折れるだろうか。初霜を置いて見つけづらい白菊の花。

いやいやいや、霜が降りたくらいなら、普通解るだろ！どれが花か雑草かくらい。と思うでしょう？筆者もそう思います。技巧的誇張とか、超現実的な趣向という人も居ますけどどうもそんな感じはしないですよね。

そこですが、霜が降りて、白菊と黄菊（或いは紫菊）の見分けがつきづらいという状況ではないか、と私は考えるのです。この状況は実際にあると思うのですよ。白菊を取ってこいと言われたけど、うっかり黄色い菊を折りそうになっちゃったよ。ってわけですね。

いや、それもないだろう。という場合に言いますと、恐らく躬恒は女か上司か誰かに菊を差し上げているわけです。上げた花は黄菊や紫菊です。その相手から、「白い菊のが良かったな……」と言われたとしたらどうでしょう。彼ならちよつとムツとしながらもこのような歌を添えて出すのではないのでしょうか。

これもまた実に詠みづらい一首でした。「白菊」の逆は「釘らし」でこれは絶対出したいと思い、更に早口言葉の「抜きにくい釘 引き抜きにくい釘 釘抜きで抜く釘」や「糠に釘」みたいな句を絡ませたいと、いろいろ試行錯誤しました。

凡河内躬恒は作者が特に好きな歌人で、回文歌にも拘ったのでボツ作もいろいろ出来ましたが、これはそのうちの一作です。

傷み釘 らしいか釘効く 指物も 試作黄菊かい 白菊見たい

(いたみくぎ らしいかくぎきく さしものも

しさくきぎくかい しらぎくみたい)

030 有明のつれなく見えし 別れより あかつきばかり うきものはなし

(ありあけの つれなく見えし わかれより あかつきばかり うきものはなし)

壬生忠岑 (みぶのただみね)

出来る奴 通の気取れた 別れなれ

彼は誰時の 現、やる気で

批難嫉みだ、忠岑損な日

(できるやつ つうのきどれた わかれなれ

かわたれどきの うつつやるきで)

(ひなんそねみだ、ただみねそんなひ)

「有明」は明け方に見える月、それが冷淡に見えた。もちろん、本当に冷淡だったのは逢っていた女性。それを直接は問わず、月の所為にする。月に代わって何とやら。そんな元歌です。

回文歌の彼は誰時かわたれ。これは薄暗くて、彼は誰か、はつきりわからない時刻という意味で、明け方です。同じように薄暗い夕方は黄昏たそがれ、こちらは「誰ぞ彼」から来ています。

寄る隙抱く 突き出され私 別れ慣れ 躲した我さ 抱きつく？唾棄するよ

（よるすきだく つきだされわたし わかれなれ

かわしたわれさ だきつく だきするよ）

ボツ歌。「寄る隙」は「夜好き」に掛けたつもり。「突き」と「月」も懸かつてる。

031 朝ぼらけ 有明の月と見るまでに 吉野の里に 降れる白雪

（あさぼらけ ありあけのつきと みるまでに よしののさとに ふれるしらゆき）

坂上是則 （さかのうえのこれのり）

白雪の なは有り得ない 歴史見し

綺麗なエリア 花の樹揺らし

逆さまでもこの通り

（しらゆきの なはありえない れきしみし

きれいなえりあ はなのきゆらし）

（さかさまでもこのとおり）

032 山川に 風のかけたる しがらみは ながれもあへぬ もみぢなりけり

(やまがはにかぜのかけたる しがらみは ながれもあへぬ もみぢなりけり)

春道列樹 (はるみちのつらき)

君らが指揮 辣腕だとは まやかしか

ヤマはと談話 辛きしがらみ記

春道の滋味、紅葉の地見るは

(きみらがしき らつわんだとは まやかしか

やまはとだんわ つらきしがらみき)

(はるみちのじみもみじのちみるは)

しがらみは「柵」と書き、川や側溝から大きなゴミを引っかけて取り除く装置。
元歌は流れの中に溜まった紅葉が丁度そのような状態になっているのを発見して
詠んだもの。

しがらみはまた、人間関係のややこしさを象徴するようにもなりました。

作製途中の回文歌、これの他に第三句を「山風か」としたのも。

君らが指揮 辣腕か死か 山川が まやかし閑話 列樹しがらみ記

(きみらがしき らつわんかしか やまがわが

まやかしかんわ つらきしがらみき)